

令和 6 年 6 月 21 日現在

機関番号：36301

研究種目：若手研究

研究期間：2021～2023

課題番号：21K13029

研究課題名（和文）コロケーションの違いを生み出す動機の解明：英語起動表現の統語と意味の実証的研究

研究課題名（英文）Empirical research on inchoative expressions from syntactic and semantic perspectives in terms of collocation

研究代表者

藏 蘭 和也（Kurazono, Kazuya）

松山大学・経済学部・准教授

研究者番号：10805302

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,800,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、起動動詞の補部に生起する名詞句・形容詞句を量的に調査するとともに、どのような意味特性を持った語句が特定の起動動詞と一緒に用いられるかについて質的に調査しました。具体的には、コーパスを利用して、起動動詞の補部で高い頻度で用いられる名詞句・形容詞句の生起頻度の調査および動詞の補部で用いられる語句がどのような意味的特徴を持つかについて考察を行いました。調査の結果、ある起動動詞の意味的特性が補部で用いられる語句の選択に一定の意味的制約を課していることが分かりました。このことから、起動動詞の持つ語彙の意味が補部で用いられる語句の選択に一定の影響を与えているということが分かりました。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の成果は、補部や主語に共起する語句、いわゆるコロケーションが、動詞の意味に基づいて選択されることを実証的に示した点にあります。この成果は、従来は英語ネイティブスピーカーの直観により説明されてきた共起語の選択が、動詞の意味からある程度予測可能であることを示唆するもので、英語学習者にとって不可欠な英和辞典や学習参考書におけるコロケーション記述の充実に役立つと考えます。特定の語とそれに共起する語句との有機的な繋がりを意識して、語彙を意味のある連鎖の単位で記憶・アウトプットできるように語彙の記述を充実させていくことで、日本人英語学習者の英語運用能力の向上に貢献できるという点で意義があります。

研究成果の概要（英文）：The study examines the noun or adjective phrases that occur frequently as complements of inchoative verbs from a quantitative perspective and the semantic characteristics of these highly frequent nouns or adjectives from a qualitative perspective. Specifically, this study conducts a corpus-based analysis to examine what types of words occur frequently as complements of an inchoative verb and what semantic characteristics these words have. As a result, we found that certain types of meaning of an inchoative verb impose a semantic constraint on the choice of noun or adjective collocates as the complement of the verb. This shows that certain meanings of a verb have a certain effect on the choice of collocates that can be used as complements of the verb.

研究分野：英語の語法文法

キーワード：コロケーション 動詞の補文研究 アスペクト 意味的統語論 意味論

1. 研究開始当初の背景

本研究課題は、当初、起動動詞の補部における語句の選択制限やコロケーションを扱った文献を探るところから始まり、語法書や文法書、欧米日の類義語辞典や学習英英辞書、さらに起動動詞全般に関する文献を調べました (Brinton 1988, Clark 1974, Freed 1979, 小西(編)1980, 友繁 2020 など)。その結果、起動動詞にどのような語法やコロケーションが見られるかを紹介しているものの、ある起動動詞が特定の名詞句 (Noun Phrase, NP) や形容詞句 (Adjective Phrase, AP) を補部にとるといふ言語現象が生じる理由について、動詞の意味の観点から十分に説明を行えていないように感じ、問題意識を持ちました。言い換えると、ある動詞と一緒に使われる語句との間に意味的な関係性があるかどうかに関する調査が十分に行われていないという点に議論の余地があると感じました。そこで、伝統文法や語法研究、認知言語学や意味論、統語論などの幅広い分野の先行研究にあたりながら、英語ネイティブスピーカーや欧米の辞書類が示す起動動詞のコロケーションや動詞補部における語彙選択にかかる制約についての研究を確認し、動詞の持つ個別的な意味と振る舞いをまとめました。また、一般的に、名詞や形容詞がどのような意味的・統語的な特徴を持つのかについて、名詞性 (Nouniness, Ross 1972) や定形性 (Finiteness, Givón 1993)、アスペクト (Aspectuality, Vendler 1957) などの観点から調査しました。

2. 研究の目的

本研究の目的は、起動動詞の補部でよく用いられる名詞句・形容詞句を調査し、動詞によって異なる特徴の語句が補部にくる理由を、意味の観点から明らかにすることです。意味の観点から、ある動詞の補部で特定の語句が用いられるという統語的な振る舞いに対する理由を説明することで、ことばの意味と統語形式との間に有機的な関係性があることを (Bolinger 1977, Francis et al. 1996, 八木 1999) を示すことができます。本研究では、特に意味的統語論と呼ばれる理論に貢献することを目指しました。また、動詞それぞれが持つ個別的な意味特性が、動詞の補部にくる名詞・形容詞コロケーションの多様さ、不規則性を説明するための要因の一つであることを示すことも本研究の重要な目的です。

3. 研究の方法

近年では、コーパスによるデータ収集により、英語ネイティブスピーカーでなくても容易に共起語に関する情報を入手することが可能になっています。そこで、大規模汎用コーパスを用いて起動動詞の補部にどのような語句が高頻度で生起するのかを量的に調査しました。そうすることで、起動動詞の補部にくる名詞・形容詞コロケーションの実態を記述するとともに、従来の文献で述べられてきたコロケーションに関する情報の妥当性について検証していきました。次に、起動動詞の補部にくる語句の統語的・意味的な特徴を整理することで、これらの語句の意味的特性の共通点や差異を意味の観点から質的に分析し、補部にくる名詞句・形容詞句の性質の一般化を試みました。最後に、ある起動動詞と特定の語句が高い頻度で一緒に用いられる理由について、動詞の意味の観点から説明しました。

4. 研究成果

(1) 2021 年度には、起動動詞に名詞が後続する begin NP という表現を扱い、日本英語コミュニケーション学会紀要に『起動動詞の補部に関する研究 begin NP を例として』というタイトルで論文として成果を発表することができました。起動動詞 begin に後続する要素として、動名詞とより名詞性の高い (派生名詞を含む) 名詞があります。当該論文では動詞 begin が補部に動名詞を取る場合と名詞句を取る場合を比較し、動名詞補文では継続的でより具体的な身体活動を表す語句 (walk, talk, move, use など) や、目的語に対して影響を与える他動性の強い行為を表す語句 (ship, work on) が使われることを説明しました。また、補部に名詞句がくる場合には、国家間の協議開始や会社の存在が世に出るといった組織等の公の行為を表す名詞 (life, operation, campaign, discussion など) や長期間にわたって継続されることが想定される行為を表す名詞 (work, career, study など) がよく使われることを説明しました。そしてこれらの語句が補部で選ばれる理由を検討し、語彙として起動動詞 begin が行為の開始 (start) と開始した行為の過程 (process) までの時間的局面を表すという意味的特徴を持っていることから、補文において長期間の継続 (process) を表す名詞がよく使われることを説明しました。さらに、名詞の持つ客観性・名詞性の意味的特徴も、補部に使われる語句の選択に影響していることを述べました。

(2) 同年度には、起動動詞 resume の補部に名詞句がくる resume NP という表現を扱い、補部にくる名詞句の特徴を記述した上で、補部における名詞句の選択動機についての考察を行い、神戸学院大学人文学部紀要に論文『動詞 resume の名詞補部の研究 動名詞補部と比較して』の形で表しました。この論文では、resume NP と補文に動名詞をとる resume V-ing という表現

の特徴について比較し、補部に名詞句をとる場合の統語的・意味的な特徴の詳述を試みました。そして、名詞句が持つ客観的な物事の記述を行うという意味的性質から、非個人的な国や企業、組織やその代表者を表す名詞句が resume NP の主語で使われ、補部にはそれらの組織等が行うであろう行為を表す名詞句がよく使われることを説明しました。一方、resume V-ing は動名詞が非完結性や具体的行為を表す意味特徴を持つことから、人(個人)が行うより具体的で、継続的な行為の再開を表す場合によく用いられ、非意図的な行為や瞬間的な行為を表す動詞であっても継続的な行為を表す場合には、resume V-ing で使われることを説明しました。

(3) 同年度には、さらに、起動動詞に形容詞句が後続する come AP という表現で使われる形容詞句の意味的特徴について調査しました。従来、seem AP と seem to be AP のような動詞表現は、統語的な観点からは to be 削除という変形規則の適応により生じるものとの説明が行われてきました(Chomsky 1957)。ただ、変形規則の適応というよりも個々の動詞の特性によるものと考えべきという議論もあり(Baker 1997)。意味的な観点からは to be の有無により表現される出来事に対して直接的関与をしたか、間接的関与をしたかという点で意味の違いが出てくるという主張も見られました(Borkin 1973)。認知言語学の分野では近接性の観点から、to be の有無によって機能的・概念的・認知的な違いが一般的に観察されるという主張もみられました(Givón 1980)。そこで、実際に come AP と come to be AP という表現の補部で用いられる形容詞句の特徴を観察し、従来の主張から個別の表現の振る舞いが十分に説明できるかを検証し、その結果を関西英語語法文法研究会第 41 回例会において口頭発表しました。佐藤(2016)による to 不定詞が未来志向の意味から認識判断の意味(モダリティの意味)を表す用法を持つようになったという主張を援用し、come to V についても客観的認識を表す構文(it is Adjective that...)の命題部文で使えること、to 不定詞補文で結果状態をあらわすこと、世の中に受け入れられている事実を表すことなどの事実から、come AP にはない客観性というモダリティ的な意味を表す特徴を持つ可能性があることを主張しました。また、come AP は、主観的な態度を表す文副詞(hopefully, unfortunately, truly)と共に主観的に出来事を記述するという意味特性を持つことを主張しました。

(4) 2022 年度には、come AP という動詞表現と比較しながら、[come, grow, get + to be AP] という表現の特徴についてまとめ、その調査結果を六甲英語学研究会 9 月例会において発表しました。ここでは、従来の分析では説明されてこなかった come to be AP が raising verb としての特徴を持っていること、さらに動作主性の度合いが低いことなどが、to 不定詞補部で使用される特定の語彙の選択(補文で受動態が使われるかどうかなど)に影響しているのではないかと提案を行いました。

(5) さらに同年度に、start NP という表現を扱って補部にくる名詞句の性質を調査し、動詞 start が持つ使役の意味が補部にくる名詞句の選択に強い影響を与えているのではないかと考えて、動詞の持つ使役の意味と補部で使われる名詞句との関連性について調査した結果を関西英語語法文法研究会第 43 回例会にて口頭発表し、データ等の見直しを行った後に英語コーパス学会第 48 回大会にて口頭発表しました。そして、フロアの先生から関連するデータと論文の紹介をしていただきました。

その後、他動性(Hopper and Thompson 1980)の観点から動詞 start の他動性の高さが補部における個別性の高い名詞句(engine, family, car, fire など)の使用に関係しているのではないかと考えを、日本英文学会関西支部第 17 回大会にて口頭で発表しました。

(6) 2023 度には、起動動詞 get に形容詞句が後続する get AP という表現を調査し、他動詞用法の場合に再帰代名詞を補部に取りることができる動詞(rid oneself of, involve oneself in, ready oneself for など)の過去分詞形(rid of, involved in, ready for など)がよく使われる理由について検討し、その内容を関西英語語法文法研究会第 45 回例会において発表するに至りました。発表の内容は、get が語彙的に「(人が動作主として行う)動的な行為」という意味を持つことが、もともと他動詞的な性質を持ち、受動化されても動的な意味を持つ rid of, involved in, ready for などとの相性の良さにつながって、動詞表現 get AP におけるこれらの表現の使用頻度の高さに影響しているのではないかと提案を行いました。

最後に、(5)の調査結果を踏まえて、動詞 start NP に関する研究について、動詞 start が持つ他動性の高さが補部における名詞句の選択に影響を与えているという調査結果を、英語コーパス学会の中でも語彙研究を専門とする研究会誌 Journal of Corpus-based Lexicology Studies において『The Choice of Noun in Object of the Inchoative Verb Start』というタイトルで英語論文の形で発表するに至りました。

以上で述べてきたような成果をまとめていく過程において、動詞の意味やその動詞の補部で使われる形式にみられる統語的範疇の違い(補部で使われるのが動名詞か、名詞か、形容詞かといった違い)が、それぞれの動詞表現の補部で生起する語句の選択に影響を与えているという可能性について発表し、その成果を社会に還元することができたことが大きな成果であったと考

えています。また、日本語や英語で論文の刊行および口頭発表を行えたことで、今まで以上に論文の査読者や読者、発表フロアにいらっしゃった方々との意見交換ができたことは、若手研究者として一番大きな成果であったように思います。

<引用文献>

- Baker, C. L. (1997) "Syntactic Theory and the Projection Problem" *Linguistic Inquiry* 10, 533-581.
- Bolinger, D. (1977). *Meaning and Form*. London: Longman.
- Borkin, A. (1973). "To Be and Not To Be." *Chicago Linguistic Society* 9, 44-56.
- Brinton, J. (1988). *The Development of English Aspectual Systems: Aspectualizers and Post-Verbal Particles*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Chomsky, N. (1957). *Syntactic Structures*. The Hague: Mouton.
- Clark, E. V. (1974). "Normal States and Evaluative Viewpoints." *Language* 50, 316-32.
- Francis, G. S. and E. Manning. (1996). *Collins COBUILD Grammar Patterns 1: Verbs*. London: HarperCollins.
- Freed, A. F. (1979). *The Semantics of English Aspectual Complementation*. Dordrecht: D. Reidel.
- Givón, T. (1985). "Iconicity, Isomorphism, and Non-arbitrary Coding in Syntax." In Haman John (ed.) *Iconicity in Syntax*, 187-220. Amsterdam: John Benjamins.
- Givón, T. (1993) *English Grammar: A Function-Based Introduction Vol2*. Amsterdam: John Benjamins.
- Hopper, P. J. and S. A. Thompson. (1980). "Transitivity in Grammar and Discourse." *Language* 56, 251-299.
- 小西友七(編). (1980). 『英語基本動詞辞典』東京：研究社.
- Ross, J. R. (1972). "The Category Squish: Endstation Hauptwort." *Chicago Linguistic Society* 8, 316-328.
- 佐藤芳明(2006). 「不定詞の意味論的再考：TAM-complex の視点から」『獨協大学外国語学部交流文化学科紀要』第4号, 41-63.
- 友繁義典. (2020). 「Come と Go に関する一考察 「come + complement」と「go + complement」を中心に」『兵庫県立大学環境人間学部研究報告』第22号, 115-123.
- Vendler, Z. (1957) "Verbs and Times." *Philosophical Review* 66, 143-160.
- 八木克正. (1999). 『英語の文法と語法：意味からのアプローチ』東京：開拓社.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 藏園和也	4. 巻 42
2. 論文標題 動詞resumeの名詞補部の研究ー動名詞補部と比較してー	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 神戸学院大学人文学部紀要	6. 最初と最後の頁 87-101
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 藏園和也	4. 巻 30
2. 論文標題 起動動詞の補部に関する研究 begin NPを例として	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本英語コミュニケーション学会紀要	6. 最初と最後の頁 37-51
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 藏園和也	4. 巻 -
2. 論文標題 起動表現の意味と補部にくる語との関係性に関する考察 - start NP を例に -	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 英語コーパス学会大会予稿集2022	6. 最初と最後の頁 19-24
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Kazuya Kurazono	4. 巻 6
2. 論文標題 The Choice of Noun in Object of the Inchoative Verb Start	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 Journal of Corpus-based Lexicology Studies	6. 最初と最後の頁 51-70
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計7件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 藏園和也
2. 発表標題 get補文にくる語句の一般化に関する考察
3. 学会等名 関西英語語法文法研究会 第45回例会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 藏園和也
2. 発表標題 起動動詞の補部に見る語彙の選択 start NP の統語と意味
3. 学会等名 日本英文学会関西支部第17回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 藏園和也
2. 発表標題 変化を表す動詞の意味と形式
3. 学会等名 関西英語語法文法研究会第44回例会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 藏園和也
2. 発表標題 起動表現の意味と補部にくる語との関係性に関する考察 start NPを例にー
3. 学会等名 英語コーパス学会第48回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 藏園和也
2. 発表標題 start NPの意味と統語的な振る舞いの違い begin NPと比較して
3. 学会等名 関西英語語法文法研究会第43回例会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 藏園和也
2. 発表標題 動詞補文にto beがくる場合の意味と振る舞いー類似表現の比較を通してみえるものー
3. 学会等名 六甲英語学研究会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 藏園和也
2. 発表標題 come+Adjectiveとcome+to be Adjectiveの比較
3. 学会等名 関西英語語法文法研究会第41回例会
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------